

# アラン

ノルマンディー人の  
プロポIV (完)  
【2014年1月号】

翻訳：高村昌憲



考えたことを何時でも何でも全て言っていたなら、そして表情と共に口に出していたなら、愚かなことですし後悔するでしょう。その様にして世論が生まれるのは、偶然とか興奮によるのです。口に出す前には、その手前の歯の障壁で止まり、吟味する権利を表して示さなければなりません。もっと適切に言うなら、それらを留めていたり調べたりすることを口に出して教えないのが理性的です。古代人たちはその意味で、沢山の箴言を与えていました。そして現代でも韻を踏むように繰り返して言う諺があります、「...搔きすぎるとひりひり痛む(口は災いの元)」。

しかし不思議なことに、率直さはそれでもなお美德に数えられています。それはまるで会話や議論の中から生まれた全ての思いつきの意見を、その顔に見ずにおかなかったり人々の鼻先で話さずにおかなかったりするのは、裏切りであり意地悪であるようなものです。

私はその原因を良く理解しています。何故なら人を支配したい者は、自分の意見を自分自身の中に閉じ込めて明かさないうことから始めるからです。しかし、彼の処世というものは他人の意見を外へ引き出すことでもあります。それは他人が恐れるか期待するかもしれないのを知るためです。そして、奴隷に求められている美德が主人にとっても利益になると気付く事例は、一つだけではありません。

支配したいと思わなければ、自由にさせて置きたいと思うことが出来ます。そして、あらゆる方法で思いついた最初の考えが、或る面では何時も間違っていると考えなければなりません。その様にあなたが機敏に判断する者たちは、取分け小鳥が歌うようにとても一方的に話をします。ここでは他人が言うことを信じないことから始めなければなりません。それに答えようとしていることを信じてはいけません。私は、日本人の情熱は地味で目立たないが、何時も非常に礼儀正しいことを、本を読みながら考えました。日本人が非常に礼儀正しいことは、彼らが情熱に応じているのと同じことでもあります。諸国民間の関係においては、礼儀正しさという作法が大変に役に立つことが分かります。即興というものは大変に危険です。

私は、激しく非難されていた極めて頑固で手の付けられない少年に、道理を一度弁えさせたかったことを思い出しています。私は手始めに少年に言いました、「あなたに子供がいれば、好きなようにさせて置くことなんか出来ないと良く分かるでしょう。子供は小さいのです。何よりも危険に晒されているのです。子供が知っていることは大したことではないし、子供が望むことは何でも簡単に出来ると思っています」。それは幼い子供の頭にとっては大変なことでした。私は理性的に話をして落ち着かせて、何かを考えさせるという目的も他にありました。というのも穏健さにも、激怒のように伝染性があつて伝わって行くからです。しかし、彼に与えた名誉に多分夢中になって、彼は次々に出てくる輝かしい考えに応じたがりました。彼は言いました、「まあ、俺に子供がいたら、叩いてやる」。そこから激しい非難が上がります。そして、私の授業は台無しでした。彼がそこで言ったことは、彼も考えていなかったことであると私は確信しました。教育されていない間違った考えは、落ち着いて吟味しなければなりませんでした。ソクラテスが行うことが出来たように、注意してその間違いを洗ってきれいにしなければなりませんでした。

しかし、人々が言って仕舞う前に言うことを知るといふ不幸な観念から私たちは出発するので  
。ところがそれは極めて珍しいことです。

(一九一二年九月二一日)

私は〈切腹〉について再検討します。それは恐らく熟考の中でより多くの活動を引き起こしました。教養ある人が進展して行くには、それを全て準備するのは各々の国民の風習や宗教です。そして恐らく国民の力が儀式の権威によって示され、それに最も奥深い本能が勝利すると彼らは付け加えるでしょう。そこから偉大な人物が何時も何か伝統的な外部世界の規範を望んでいて、それは何よりも強い皆との共通感情となり、結局は神秘的で実践的なものを望むようになると結論付けるのは難しくありません。

私が考えるには、情熱というゲームにおいて外部からの原因が沢山の力を付与していると思います。肉体的状態や気分を何時も探して下さい。情熱の働きというものはそこから生じます。所謂原因とは、きっかけとか機会でしかありません。

以上は自殺する老人のことです。彼の人生は永遠に悲しく、退屈で、生き続けるのが重荷であったのだと私は思います。議論することが出来るような理性がありません。それは何でも駄目にして仕舞う病気とか墮落によります。精神科医たちは、自殺者の癖を良く知っています。明確な理性はなく、他方では何らかの知性の混乱もない人間は、多くの試みを行った後で、絶えず監視をしていても自殺するようになるのを人々は分かっていました。多分、病気がそのような徴候を示さない場合はないのであり、先に用意された理性にはより強い力があると思われれます。しかし、検証はしなければなりません。破産した人々のうちでも、自殺する人と自殺しない人がおります。或る人々は不名誉を人一倍強く感じると言われれます。だがその上更に、別な風に考えることも良くあり得ます。償うとか改めるために生きなければならないと結論付けることも良くあり得ます。名誉が欲しいのはその時です。この論理は、他の論理に劣らず価値があります。要するに人生の味が未だ快いものであったなら、何時も死なない理由を見出すことだろうと私は信じます。結局のところそれは何時も気分によるものであり、決定が下されれば健康に応じています。

従ってそれを探す時、儀式は理性のように見えます。我が国には決して切腹はありません。或る数の男性や女性はそれでも自殺しますが、儀式ではありません。もしも我が国に儀式があったならば、儀式とともに自殺するでしょう。しかし、その上に理性があるのです。多分そうです。しかし、あらゆる理性が情熱に従う状況になっているのです。

何故私たちは切腹しないのでしょうか。学校で教えるのは、何時も社会の利益です。英国では憂鬱は一般的であると言われていますが、法律の手が届く範囲で自殺は法によって罰せられます。しかし、それらの罪は自然に力を失っているのです、恐らく他の解決がもっと合理的になって来ています。それは自殺を妨げることが出来ないのを正当化するものです。それは日本人の解決であり、極東の島民たちも或る種の憂鬱に陥りやすいことを証明しています。同様に、我が国の葬儀のように、自殺も規定されました。我が国の法律では自殺を扱うことは決してありませんし、その習慣もありません。そのことは心の均衡を証明しています。

(一九一二年九月二三日)



会話においては屢々、反対するよりも自由を主張する以外に方法がないことがあります。何故なら、独断的で我慢がならない人の発言があるからで、その人は議論が許されないことを分からせようとします。何に対しても意地悪な議論をして、殆ど確証もなく情報を集めては強い口調で発言しますが、もう一人が間違いであると確実に証明することは何時もありません。しかし、反論者が話すのを恐れず、先ずは話す権利を肯定することは少なくとも示します。それ故に会話における自由な精神は、屢々弱いと思われれます。

この様にして、暴君の精神主義に反対して、急進的な唯物論が生まれました。この様にして、別分野では神学に反対して、反軍国主義が生まれました。醜聞はまさしく、その人自身と関係のない外部で独断的に生まれるものです。そして、そのことのためにまさしく醜聞は、反論者に好まれます。ドレフュス事件ではやり過ぎが見られました。そして、あらゆる種類の反聖職者主義者たちがそのことを表すや否や、屢々宗教的なものに立ち向かうことしか行いませんでした。この精神の運動を理解しなければなりません。司教に聞いて貰う時のどんな喜びも、精神に圧政を加えたいのです。「あなたに力はない」。精神は先ずそこから明らかにします。気に入られるために話をするや否や、あるいはお世辞を言うとか他人の真似をして言うや否や、思考は消え、言葉が無意識になって、良く知られていることを証拠にして行くだけです。

このメカニズムは、自分を欺すことから始めるのが自由な思想であるのを避けられません。そこから世論という、暴君たちのための自然な戦術があります。主張されることを先ず全て否定する者は、良識という如何なる自由意志に照らしても維持出来ないことを暴君たちは良く知っています。カトリック正統派というものは、それを異端として片付け、反論者を異端として押さえ付けます。「あなたが愛国心という型に嵌まらなくなった時から、あなたは脱会した説教師であり、アナーキストです。そして、もしもあなたそのことを認めなかったなら、遠慮が残っているからです」。更にその上、反対者が情熱を疑わなかったなら、障害の上を突進するでしょう。そこにも陰謀があります。小学校教諭たちのことを人は良く理解していました。何らかの曖昧な発議に基づいて権力者たちは、労働組合に加入した教諭たちを大変に重要な義務に背いていたのであるという考えを広めました。その抑圧は間違いを齎すに違いありませんでした。その様にして後から正当化するに違いありませんでした。それは恐ろしいやり口です。

幸いなことに、それは何も与えませんでした。恐らく、犠牲者もいなかったらと思います。教諭たちは体制の中で抵抗します。彼らは法廷で弁護します。何処に罪があるのでしょうか。そのことは決して言われていません。権利について誰もが間違っているのです。しかし、誰もが余りに容易で単純で抽象的な演説には陥らないでしょう。私は世論という暴君を憎みます。口づけをするために聖体を置く小皿のパテナを差し出す主任司祭のように、公務員に給料が支払われるのは、それ故にあらゆる行為を文章で定めて纏めているからであると私は思いません。しかし、この激しい怒りを鎮めて全てを率直に判断しなければなりません。恐怖は恐がることにあり、それが又恐怖になるのです。

(一九一二年九月二五日)

私が最近読んだ最新作は、非常に難解な数学に関する哲学についてのものでしたが、この分野を考察すると自然に打ちひしがれ、余りに悲しい散歩をするだけでした。山登りをされていてやっとの思いで山頂へ到達した時、もっと高い山頂を見付けるようなものです。中間地点や高等数学においては何時もそんな調子で、乗り越えた困難は子供の遊びでしかないと信じるしかなくなり、結局今だに理解していないことにびっくりさせられるようになります。もしも私がそこに止まっていたなら、それでも学ぶことが本当だと思っても私よりも少しも進歩していない数え切れない多くの仲間たちに、私は何を話すのでしょうか。半神を除いて大部分の人々は、学識のある人々の間でさえも、全世界のことを実際には何も理解していないのは本当でしょうか。多くの本を読んでも何も工夫しなかった自惚れ屋が、ある日私にエネルギーの保存は数学的実践のためにしか意味がないと言いました。その関係に関して私は最善の例を出して幾つもの手段でそれに反対しましたが、彼はそのことを外の処でも繰り返すようになります。両方のことを正確に話すには、全てが分かるまで待たなければならないのでしょうか。

本当のニュースと共に新聞は、それらのニュースを微妙過ぎる歴史家たちに屢々投げ込んだ無気力から、それらを理解するのを放棄することなく私を引き出してくれました。飛行機は大変順調に飛び立つのは本当です。しかし、理念が失敗した儘であるのを理解するのは面白いことです。この機械の方程式は何時も決定されません。飛行を支える圧力が、色々な理論で予測するよりもっと大きく影響を与えているのであると私は既に言いました。

しかし、もっと面白いことがあります。水とか空気を切って進むのに最良のものは、前方にナイフの刃で後方は丸みの幅のあるものと表面上は類似している、と長年信じられて来ました。私は、魚の形や漁船の形を見て、反対であると疑いました。或る男が何本もの針を飲み込んで暫く経つとあちこちから出て来ますが、何時も端が丸い方が先頭であったことに私はびっくりしました。そのことから私に考えさせてくれたことは、多少なりとも流体の中においては固体の時と異なり、何時も鋭く切っていく方が引っくり返っていました。何らかの反動というものによって流体の広がり分割させる働きをする部分であるナイフの刃は、何時も後方になった方が有利に働くのです。

そのことは大変に混乱しましたし、不確かでもありました。しかし、その後は経験がはっきりと分かせてくれました。進むのに最も適した形状は、前方が丸く、後方が細くなっているものです。そして理論は同様のことを何も予測させなかったことを、私は最近本で読みました。私は理論というものを少し笑いたくなります。この問題において、私は経験に先行して思考することを軽視するわけではありません。しかし私たちが信じるのは、まさしく純粹に代数を崇拜することのない数学者です。形態科学によってその存在が分かるような観察を育成する数学者であり、彼らが前もって解くのです。この物理学に関する些細な問題も、十年以上も前から解いているのです。古代ローマの予言者たちが間違えた時は、急いで笑わねばなりません。〈精神〉を尊敬することは〈精神〉を殺します。

(一九一二年九月二八日)

比例代表制で不条理に見えることは、有権者が綱領に投票しなければならないことです。つまり政治制度のための投票になっているのです。それは実際の政治を伴うものではありません。それは現実離れした高齢者に私たちを帰します。例えば、私が〈急進的な〉綱領を想像するなら、私たちは平穏な政治を約束しますし、利益や将来や祖国の栄光に熱心です。しかし、この要項の決まり文句からは何も解決されません。両方の利益を判断すること、侮辱を見分けること、何らかの譲歩とか計略を考え出すことが実際には重要です。決まり文句は何ら光明を齎しません。或る人はフランスの名誉がかかっていると言いますが、他の人はそうではないと言います。選択するには、判断力のある人間でなければなりません。彼は個人的に責任を感じ、集团的運動に反逆し、恐らく同僚よりも寧ろ有権者に意見を求めます。

その同じ綱領が説いているのは、「調査も苛めることもない所得税」です。決まり文句では何も解決しません。実際にはその様な綱領の規定は、調査とか苛めがあるかどうかを知ることが重要になります。従って所得税を約束した急進者たちは五つか六つの計画を拒絶して、自分たちの行動参加を忘れなかったことを十分に良く示したことが良く引き合いに出されます。彼らは言います、「何故なら私はあなたに合理的な計画を約束したからで、私があなたに証明することはそのことで他のことではなかったのだ」。私が知るべきこととは、私は急進的な有権者ですが、私の立候補者が受け入れるべき口実やきっかけを引き合いに出して心から大変に満足しているかどうか、あるいは反対に平等とか公平という考えに基づいて税制を改革するためにしっかりと決心しているかどうかです。ところが私はそのことを見抜かなければなりません。私はその人間を知り、観察したり、話をしなければなりませんし、彼が如何に生活し、何をして生活し、誰と付き合っていて、子供を如何に育てていて、彼の妻に関する意見がどうであるかも知らなければなりません。何故ならそれらは全てが重要であるからです。そして郡の中では誰もがそのことを知っているのは、スパイ行為をしないで済む共同生活への必要性からです。もしも代議士が宗教的儀式によらず結婚し、子供たちも同じで、彼の妻も婦人参政権を要求し、遊び回らないで貧しい子供たちの服を着せたり教育するのに忙しかったなら、それらのことが私にとっての保証になるからです。もしもその人間の主張が自由意志によって屢々示され、家族の中にあっても良識があり、友人たちにも良い忠告をして、仕事にも良心的で、正直で、勇敢で、地方の争い事にも公平で、動揺しても自分を管理し、何時も好意的であったなら、私は彼を信頼することが出来ます。彼は約束していなくても行います。あらゆる状況で最良を判断します。次々に私に与えるのは、私やその他の者たちへの大変に明確な説明であり、遠回しの言葉ではありません。私はここに可能な限りの保証を全て持ちます。私は、あらゆる場合において、私の代理者の弱さと強さを知ります。私は、予め彼の良い処も迷う処も、如何なる場合に危険になるのかも知っています。私は彼を監視し、皆に知らせます。私たちは彼を押し進めるようにさせるか、引き止めます。それはこの世で一番簡単なものになります。ドレフュス事件を思い出して下さい。

そしてあなたが望むことは、内容のない決まり文句でしかない要項を読むことで、私の知らな

い党派の中に隠れていると言った方が良い人々に私の声を届けることです。彼らは党派の決定や規律と私とが対立していることを望んでいます。要するに党派は四年間私自身の名において暴君になっているのです。この選挙制度が当選者の気に入られていることを私は既に理解しています。しかし、有権者は決してそれを望んでいません。

(一九一二年十月七日)

キュビズム（立体派）の画家たちは嘲笑されています（1）。人々がもしチェスを知らなかったなら、チェスをする人たちも嘲笑されることになるでしょう。芸術は純真さから離れれば、ブリッジや西洋双六やトランプ占いのような遊びになって仕舞うに違いありません。その変容が最も明瞭だと思ふのは音楽です。何故なら私の裡には、殆ど似てもいない二人の音楽家が住んでいるからです。軍楽隊の音楽を聴くと私は、他の感覚も一緒になって完全に浮き浮きした気分になって来ます。この芸術は少しずつ形を整えて行きますが、新しいものと言うよりも寧ろ模倣だと思ひます。或る楽派の人々にはそれで申し分がないようです。この様にして小太鼓やラッパや大太鼓やシンバルが使われます。作品の表現法も、ソネットのように幾つも決まっています。「サンブル川とムーズ川」は、皆が知っているように縦に列を作って進む曲です。伝統的形式で儀式に従って曲を作って下さい。新しいものようになります。楽しさが望まれ、現代の音楽芸術の全てのお手本がそこにあると私は考えます。芸術作品の固有性とは全てのものに働きかけるものであって、準備でも努力でもなく、注意力でもありません。

それは耽美主義者たちを笑わせます。しかし、私は彼らを笑います。彼らは結合、比較、発見の好みを美的に楽しみます。楽しんで考えたいのであり、私が考えるに、最も大切な楽しみを感じるのではなくて、殆どそれを知ることがありません。それらを期待したり、取分け頼みにすることはありません。例えば、古いステンド・グラスが評判になると、彼らは真つ正面に立って透かして見ますが、それはオペラグラスの両端を嗅ぐ猿と同じ様に愚かなものです。ステンド・グラスの美は全体の中にあります。人はそれを眼の一点から味わい、あるいは別のものに反射して味わうものです。何かに進んで真剣になったり、敬虔になったり、沈思黙考して注意深くなっている者が、身の回りの大聖堂の美を体験するのです。そして、外からでもそれを申し分なく見る通行人がおります。何故なら通行人はそれを見詰めないからです。同様に、音楽も傾聴されるために創られません。更に同様に、もしも私が食堂に、水面上の雲が輝いた美しい海の絵画を持っていたなら、休息や平静さや、私がそこから受け取る幸運にとってはためにならないでしょう。そんな時に欲しいのは良い安楽椅子であり、良いベッドです。

こうした訳で例えば音楽のように、新しい結合を探す専門家を邪魔するものは何もありません。そして私がそれらを学んだり、楽音の混合にそれらを認めるのに慣れるのを邪魔するものも何もありません。それはまさしく私に達したものであり、大変に複雑な作品を幾つも生みました。そして私はそれらから精神の喜びを手に入れたのですが、恐らくきちんと話をする美しさをそこに見出すことはありません。音楽というものは殆どが今日この種の寄せ集めであり、手ほどきがなければ決して喜ばれません。類推によって画家たちは色彩や形で良く演じて玄人に喜ばれることも出来るのであり、実際の美や芸術とは何ら関係がないと私は結論を下します。そのことは一般的には笑われます。何故なら独創的であるからです。しかし、美しい装飾も独創的です。そして音楽には、似ているものが決して何もありません。そのことは、欺瞞がもっと容易に生まれるということになるのです。

(一九一二年十月八日)

(1) 当時、官展のサロン・ドートンヌ(秋の美術展)がパリのグラン・パレで開催されていましたが、立体派や未来派の作品もその中の一室に展示されていました。

或る市民は、間抜けに相応しい行為としての新しい交通法規を私に指摘します。しかもその印象は余り強くありません。〈スピード超過〉の違反が廃止されるらしいのです。しかし、下手なドライバーの責任は全てその儘であることははっきりしています。それは良識に照らして正しく規制することになります。事故への救済策のように思われている罰則について、私は言わねばならないことがあります。多分、十回は繰り返して言わねばなりません。

損害の償いは保険が決めてくれますから、それらに任せて置きましょう。肉体的結果を宥めるように勿論、罰金としての体刑、免許停止、監獄刑はなければなりません。しかし、事故に応じて罰するのでしょうか。それは可笑しいことです。何故ならその罰は、望まれもしなかった状況によるものであり、それは望んでもいなかったからです。誰も望んで車で人を轢きません。人間が殺人を犯す時は、重大な罰の観念はありません。だんだんと自分の心に生じてくるのを避けられなくなって来て甘やかして、敢えて言うなら自分と約束するのが喜びなのであると推測出来ます。

しかし、例えば町中を通っている子供を轢く人間は、そんなことになろうとは決して考えません。彼は空いている道路を見ます。事故もなく通れると思います。平坦なこの道を利用しますし、障害もありません。無理をすることはあります。でも一つでも疑問があれば、速度を落とすでしょう。事故は何時も事前に避けられます。鉄道の機関手は、機関車の上で自分の不注意の最初の犠牲者になる、と私は何度も言いました。ですから、もしも速度を落としていなかったなら、鉄道の線路は空いており、疑問の欠片もないと思ったのははっきりしていると信じて下さい。もしも事故が起きると考えたなら、ブレーキを掛けています。安全性そのものは、罰による見通しよりも有効に働きます。それはドライバーにとっても本当です。速度を定めて状況を知覚しても、事故には何時も不可抗力とか、良く言われるように運命という性格が伴います。意志ではどうにもなりません。私は何時も無罪放免します。

反対に、もしも法律が今行われているように定められていたなら、制限速度の制定そのものが間違いであったとしても、私は追い越して行く者を有罪にします。何故なら、彼はその速度を守りたくなかったからです。彼は犯罪に照らしての殺人として、速度を照らしているのです。過ちが彼を引き付けるのは、道理とかその他のもののためです。罰が、殆ど避けられず或る種の自動的なものであるなら、罰は彼を遠ざけます。罰はそれ故に役立ちます。そして事故があった時、速度超過がより厳しく罰せられることを私は認めることもありません。というのも事故は望んでいなかったのであり、望んでいたのは速度超過であったからです。事故だけを見て罰するこの規定はそれ故に滑稽です。

そして今後は事故が起きないように、歩行者に強制して道を空けるのを望むなら、滑稽さを通り越しています。困った人々はそんなことしかやりませんが、死刑が原因なのです。間抜けにはそれ故に、言い過ぎるということがありません。



組織された集団が如何にして直ぐに盲目の中に陥るのかを観察することは有益です。何故なら、組織を守ったり拡大させることを気に掛けると、結局は教義というものを奪い支配するからです。私は、社会主義者の党派のことを考えています。最も有力な主題の一つが、だんだんと政府は財政の指図の儘に動くということです。それを誇示するための場が大臣にはあり、そして国会議員にもあり、大きな成果がなくても大論争になります。本当の支配は、舞台裏とか台詞を小声で教えるプロンプターの穴にあります。従って、大銀行家が作品を書き、舞台を作ります。その他の者たちは単なる俳優です。

一人ひとり危険を良く理解しています。しかし、ここで私はもう一度言います。それは明日の危険です。一人ひとりの人間が、もしも直ぐに、そして全て自分の意思で抵抗しなかったなら、ここでは共犯者になります。如何に抵抗するのでしょうか。投票で抵抗するのです。あなたは最早、清廉潔白な人でないと支持しません。誠実な人であることも忘れてはなりません。彼らとは顔見知りです。議会にはそういう人が多くいることを私は付け加えます。彼らは屢々弱いが、彼らに勇気を与えてくれるのが有権者の関心事であると私は認めます。従って、私たちの努力の全てを何処に差し出さなければならないのでしょうか。市民なののでしょうか。私たちの声を清廉潔白な一人の市民に集めるためには、昔からの彼の財産や生活の全てを知ることです。郡選挙の投票が一回の投票で当選に必要な票数を得られない当選未定時の選挙同盟で、私たちが〈お金〉の権威を失わせるかどうか、最低限の必要性があるのはそれによってです。

そのことを良く考えて下さい。候補者が多少なりとも左傾化しているかどうか、急進主義者又は社会主義者かどうかを知るのは重要ではありません。言葉や政策は糞食らえです。十年か二十年に亘って見てきた人間が、反動的かそうでないかは良く分かっている筈です。そして重要なことはお金以上に、赤が鮮やかか薄いかの左翼的な人であるかないかを選択することです。私が知ったのはそのことです。皆はそれを明示することが出来ます。ところで前進させたり支えたりしなければならないのは、その人間なのです。というのもあなたに分かって貰いたいのですが、共感に値することは、旗の色よりも寧ろその竿を支えている人の力強さであるからです。この筋金入りの性格の人は、選挙を保証する盲目的な約束や妥協には決して同意しない、とあなたは言って何でも反論します。しかし、性格よりも寧ろ政策を考えたいと言って、まさしく比例代表制の制度を支持しているのはあなたなのです。

従って、あなたはブルジョアを苛（さいな）む社会主義者たちを必要とすることが多い程そのようになります。彼らは工場を買い上げ、必然的に口先で金利生活者の首を刎ねます。それらの言葉は高い費用がかかりません。そして彼らには才能と説得力があつて、申し分なく輝いております。何故なら彼らは、まさしく思索家と言うよりも寧ろ弁護士です。最も悪賢い人たちが党派の中で大物とか指導者になります。そして、私たちは大変に有名な幾つかの事例によって知っていますが、彼らは次から次に事業を始めて何か強力な地位に就くことが出来るようになるのです。郡選挙の投票がまともな精神で機能する時は、巧妙でない人たちが先に推されて、私はそれに満

足します。何故なら恐らく、彼らにはより強固な信念があり、躊躇いもあるからです。勿論、もしも社会主義者たちの声が才能よりも誠実の方が好きで、改革への誇示というものよりも、繰り返し証明される魂の力の方が好きであったなら、勇敢な人々は今でも権力者たちを監視しているのです。

(一九一二年十月十三日)

反動分子が言いました、「素晴らしい制度だ。あなたの証言によっても、絶えず危険である。あなたはそれを守るために時間を潰している。あなたは世論に土台を置いているが、その地方の世論が偏狭になると、全てが無駄になるとあなたは叫んでいる。あなたはそれを普通選挙に土台を置くが、いわば数学的に厳密な選挙を準備したくなると、それは〈共和国〉の死であるとあなたは言う。しかし、この不幸な国を生かして置いてくれ。自然に戻って行動させて置いてくれ。あるいは共和国が、政府というもののの中で最も自然でなく、土台もしっかりしていないことを認めてくれ」。

独裁が、ある意味で最も自然で土台もしっかりしている政府であり、国家権力そのものの行為によって維持するように行使したり所有したりする権力であるのは、全く本当です。独裁者は警察と官僚と新聞社を握り、一般的には彼ら全てにお金を出しています。従って、国民の力というものは国民にはね返ります。要するに、自由に対する闘いは、政府の機能と非常に良く一致します。それは何世紀にも亘る歴史そのものでした。

反対に、共和国は必然的に機能させられますし、時には物凄い反対によって引き裂かれますが、それは同じ勢力の中で壕を廻らせた障地を置いています。統治する勢力が何時も独裁に変わるようになるのは偶然ではありません。権力というものは検査や批判をする者を恐れます。彼が大臣であることは殆どなく、食料品屋や靴修理屋や土木工事人たちから批判されて、日に二十回も不平を言っている局長であることも決してありません。外務大臣は、外国の法務省に対して失敗した部分を行います。そこに熱中します。私は、祖国の偉大さと同時に栄光のために働くことを信じるように勧められさえします。何故なら世をすねた冷笑家は思っている以上に少ないのであり、情熱家が何時も大いに熱弁を奮っているからです。しかし、それらの小さな駒を進めている間に、その材木は生き始め、考え始め、抵抗し始めていたなら、その怒りを想像して下さい。

それと同じ効果は、小規模でも官庁や県や郵便局や学校でも見受けられます。本当の王室の力を行使する者には、上官が部下になるという悪化を伴います。それは自分の責任を知ることになり、その代わりに自由でいたいし、自分の分野での実力者になりたいのです。軍隊では既に最悪です。何故なら権力は服従を和らげるからです。同様に、公開討論や密告や抗議により行使される低い地位の者の力を如何に認めるのでしょうか。情報を整理するカードの時代になると、密告という驚くべき言葉の力に対して、幾つかの権利を要求するようになりました。今日、同じ集団内では敢えて言われませんが、国会議員たちは公の密告者であり、そのことを十分考えています。そこから国会議員たちに対する際限の無い怒りがあります。何故なら、まさしく国会議員たちは自分の仕事を行っているからであり、市民の名において手綱を握る権利を持っているからです。そこから疲れを知らない中傷があり、誠実さが無い訳でもないが、危険な考えがない訳でもありません。というのも或る国会議員たちが平然と例に挙がるからです。そんなにも多くはないのですが、実際に特に狙われるのは勤勉で清廉潔白な人々です。簡単に言うなら、共和国は共和国に対しての独自の力を持っているのです。以上が、共和国は実際に暴風雨とかコレラとか暴君

よりも自然ではないと言える理由になっています。

(一〇一二年十月十五日)

奇妙なことです、人は私に闘争本能が祖先から来た遺産であると理解させたいのに、私は良く知られているこの考えに抵抗します。私は決してそれが正しいと思いませんし、その可能性は一つもありません。もしも祖先が後世に何か残したとするなら、祖先が残したのは身体の大きさと形、栄養の消化器官、感覚器官、そして筋肉であると私は思います。或る人が近視なのは彼の父親が近視だったからであると言われれば、私は納得しますし認めます。同様に、大きいとか小さいとか、金髪とか褐色の髪とか、顔が黄色っぽいとか赤いとか、逞しいとか弱いとか、勇敢とか臆病とかと言われても認めます。それらは道具とか工具とかと同じ様に、何通りにも使用出来るからです。泥棒にも、近視や遠視、赤い顔や黄色い顔、大きい人や小さい人がおります。私の祖父が猟銃を私に遺したのは、私が人を殺すためではありません。私の祖父は、私がナポレオン支持者とか民族主義者になって怒りを良く示せるような能力を遺したのでもありません。怒りは銃のようなものです。戦争のためとか、戦争に反対してもあちらこちらで使用出来ます。私が、自然と悲しくなるのは遺伝のためであると仮定してみましょう。そのことは、私が少しも泣き虫でなくなるようになつたりしますし、大変な愛国者になつて嘆くこともあります。あるいは人類愛のトルストイの弟子になることもあります。悲しみには、これらの考えが全て身に付けられています。上機嫌はそれらを別のものにします。ところが楽観主義者は、共和主義者と同じ位に極端な王党派の人にもおります。彼は、戦争と栄光、あるいは平和と正義に多くを期待します。狂暴なのは強盗も警官も同じです。屠殺業者の若者も定期市での怪力男も同じです。但し、大変に優しい性格の人が警官であるか、定期市での怪力男であるか、屠殺業者であつても人は理解します。

人間は最早本質的に好戦的ではなく、平和的でもありません。人間は両方です。共感や愛情や連帯から平和的になりますし、怒りや不機嫌や競争から好戦的になります。同じ人であっても、敵には怖れ、戦友には誠実で、弱者には親切で、そして女性がいると大変に礼儀正しくなります。まったく彼は殆ど同じ人間でなくなります。光が反射して眩しいので女性を小ぎれいと仮定してそのように振舞い行動するので、大変優しくなります。怒りっぽくなつたり憎しみに燃えたり嫉妬深くなることはなく、情熱について正しい思想とか親友がなければ、恐らくそこで殺人者になることもあります。実際に、一七八九年のフランスとか、友情と詩の地であつた当時のドイツのように、平和的な国民は機会と事件とによって突然に好戦的になり得ます。狩猟は、人間の残酷さが遺伝されているから好かれていると良く言われます。しかし、狩猟が好かれているのは銃があり、土地があり、狩をする友人たちがいるからであると私は思います。従つて私は、大変に背が低いから自信を失っている男に何時も言います、「未来を手に入れなさい。それがあなたの人間としての仕事です」。

(一九一二年十月十六日)

(次章へ続く)

私は〈習慣〉を崇めません。しかし、習慣は今風の神です。そしてアリストテレスによって知られている次の言葉を繰り返して言うモラリストたちには事欠きません。「美德は習慣である」。しかし、私はそんなことを信じません。私は大変に力のある習慣を幾つか引用することが出来ます。自動車を運転するように人間の能力を増大させたり、バイオリンを演奏したり、泳いだり、殆ど狙いを定めなくても銃で上手く当てられることです。でもこれらの習慣が与えてくれるものを、私は何も出来ません。バイオリン奏者は、一杯のコーヒーを飲むうちにワルツを一曲演奏します。あるいは芝居の一場面では協奏曲かもしれません。自動車の運転手はやくぎ者かもしれませんし、あるいは事故を起こすことなく火事場へポンプを運ぶかもしれません。上手な射撃手は狩人や泥棒や憲兵になるのですが、私には分かりません。

更にその他には、単に習慣に従って生活することに存する種類の習慣があります。半分眠っているようなもので、決して全てが目覚めていないようなものです。その行動は同じ順番で毎日続き、言葉が思考に代わります。それは夢遊病者の人生です。物も人も最早、良く見て理解しないで済ませて仕舞います。愛しているのか、愛していないのかも最早良く分かりません。喫煙者は、煙草の香りや味を愛しているのでしょうか。彼は何も分かりません。この質問の意味は、彼にとって同じではありません。彼は煙草を吸い、或る種の満足を覚えます。もしも煙草もパイプもなかったなら、彼には何かが足りません。彼は不安になります。手探りでも探します。

私が考えるに、この本能的な規則正しさは特に状況にもよります。喫煙者はしかるべき時と場所でないと決して吸いません。どんな時でも場所でも良いという考えはありません。しかし、そのような時に安楽椅子に座っていると、パイプがなければなりません。状況を変えて下さい。するとあなたは欲求が除かれます。美德が、もしも習慣でしかなければ、悪徳も同じ様なものになる危険があるのは本当です。

ライオンは命令をする人に吼えて、次に善良な大きな犬のように輪の中を跳ぶ習慣があります。ライオンは調教師の肌を尊重しています。何故なら決して噛まないからです。噛めば尊重はおさらばです。犬も同じです。人間の肉は、食べれば美味しいことを知りません。しかし、その時まで忠実だった犬たちが、子供たちを追いかけてがぶりと噛み付くことがあると言われます。最初に味わう血の味は、いわば信頼が置けた過去の全てを消して仕舞います。それは情熱の感情に塗られることです。従って、人間において本当に私が恐ろしいと思うのは、行動が齎す半睡状態の無気力な生活です。彼は穏やかな人間のようにありますが、最早戦争よりも平和を望みません。彼は何も望みません。彼は成るように成るのです。私たちの国で、彼は皆と同じに生きています。植民地と同じです。同じ人間が突然に不正を働き悪人に成るのだと理解して下さい。その腹底では悪人でも善人でもありません。彼はその機会や状況を追って行くのです。それ故に平穏とかいうものは、何時も平和を物語りません。戦争は、彼と同じ人間たちによって何時も起こる可能性があるのです。そして、もしも文明が理性によって望まれなかったなら、文明は殆ど持ち堪えません。従って私は、目覚めていて理性的で頑固な平和への意思しか当てにしません。そ

れは何時も機会や状況以上に強固なものです。

(一九一二年十月二一日)

私たちにおいて非常に細かく戦争の恐怖を理解していた女性に、私がそのことを質問した時、彼女は言いました、「救急車や病院にいる時に見たことを私は語れません。それは私には夢のようです。決してそれを信じません。これらのことを見た人々や私自身も、思い出す限り無感覚に成っていましたので。死者も負傷者も争いも葬式も敵国の占領も挑発も、全てが私たちには自然のように思われます。一人ひとりがやるべきことをやっていました。私は、多くの危険にさらされて敗走する姿から、通りでびっくりしている自分を想像します。私はそのことを良く考えましたが、まるで横断しにくい通りを横断する時に、車に注意するかの如くです。この様にして私は家に戻るのに成功しました」。これらの話は、想像力によって恐ろしい光景を与える芸術家のものと少しも似ていません。芸術家は大変静かでゆっくりとした読者を望んでいますし、計算されたタッチで怖がらせます。しかし、実際の出来事は形式張らずに私たちに襲いかかり、回転させ、殺し、固くします。それが直ぐに現実になります。この深刻な絶望の中で、新しく起きた事故が代わる代わる苦痛と喜びを私たちに齎します。人は空腹になり、食べて、眠り、疲れて、休息を取ります。私は、無料のスープにありつくために列に並んでいる貧しい人々を見る度に、傍観者の感情を持ちます。しかし私は恐らく、彼らの眼に大変に複雑な考えを読み取ります。彼らは空腹であり、スープのことを考えているのです。マキャベリが〈暴君〉の術（こつ）を述べるなら、手強い多くの敵を撃破したい悪賢い王子は、その時同時に全ての人々を殺さなければなりません。というのも、これらの私生活の不幸というものは目撃者がいなければ周りへの反撃はないからである、とマキャベリは言っています。自分だけの不幸によって一人ひとは、他人の不幸に無感覚になって仕舞っているのです。一人ひとりの不幸は、同情されないために表現によって自分を大きくさせることが決してないことも付け加えましょう。この作家のような現実主義者は、芸術家よりも多くのものを私たちに教えてくれます。内戦とか外国との戦争の話を読んでも、戦争の当事者たちは穏やかな読者の感情を全然感じていないことをその時人は理解します。もっと単純な原因から夢中になってそこには魂胆が何処にも無いことを理解するのではなくて、〈恐怖〉の現場を大変下手に描いて何か根の深い偽善によって概して隠されている残酷さをそこに暴きたがっている、と歴史家たちが考えたことは間違いです。

ブルガリア人たちは二十五年間も戦争の準備をしていましたが、行われることはありません。ある日、望んでこの戦争に参戦するとか、あるいは決して参戦しないとか言うように、長い忍耐に結論を下すことも出来ました。この二つの結論は、純粹に思想的なものでした。理解させることは現実的な風俗の不安定さであり、最も大きな変化は機会によるということであり、新しい行為という必要性が感じ方を突然に変えます。それ故に私は、歴史が語るそれまでの戦いや宗教や民族に起因した必然性を決して信じません。二十五年間続く武装された平和は、何時までも継続出来ます。彼ら戦士たちはその上で、季節が来れば腕の良い農夫になれるのでもあります。

(一九一二年十月二四日)

平等主義の民主政治に反対する議論がありますが、それは私がオーギュスト・コントに見出したものです(1)。そして、それは屢々繰り返され言われて来たことで、国民投票で何時も無知な代議士が言っていたことです。それ故にコントという哲学者は、最良の状況を見過ごして仕舞うようなものである急進的平等や制約のない批判という制度を重んじたくないのです。そこでの能力は、何時も調整や統一のための卓越した社会学者としての忠告であり、一人の専門家の博識ある手腕のものです。

代議士が働いていた仕事以外では大抵の場合、とことんまで何も知らないことは極めてあり得ることです。しかし彼が弁護士であったならば法律やその手続き、司法制度の不備を十分良く知っていることに注目して下さい。商人であったならば会計や経済に明るく、請負業者であったならば土木工事についての言葉を有効に使って言うことに注目して下さい。そして他も推して知るべしです。従って代議士の知識のなさや無知について話す時、私はそこに簡単な進展や何の力もないことしか理解出来ません。

しかし、私は知識をそんなにも買い被りません。寧ろ、個人的品行の素朴さや誠実さに注目します。というのも、もしも代議士が手腕を用いるために、大船主とか大企業家とか大銀行家とか大弁護士と見倣されるならば、その予想は常に騙されることになるからです。彼らは、大変に器用で頭が良い人々と知り合いになりますが、多分何時もの事業の習慣から自分たちの財産のことがばかりを少し考えすぎます。あるいは自分たちのいる時や、仕事の時に行うように、独裁的な権力を自然と進んで行使します。従って彼らの知識は私たちには高いものになり得ます。私は、余り出世をしないが誠実な人間の方を屢々良く好きになります。要するに、私は何よりも先ず〈権限〉というものを望みません。

何故でしょうか。何故なら私たちは、公共業務になければならない範囲でそれを持っているからです。最高裁判所の破棄院や国務院は法律を深く認識します。会計監査院は財政に関する知識を持っています。全ての省庁には学識の深い局長がおります。戦争も船舶も、自分の仕事を知っている人間次第です。実際に〈権限〉は事業のものです。次には、監視のことが残っていますが、それ程難しいことではありません。

人は大臣たちを部下よりも博識に違いない、と間違っただけで見倣します。大臣は、定められた仕事を監視するための国の代表とは別のものであります。そして、私たちには監視人を監視するために予算の報告者である別の代議士がおります。例えば化学者でなくとも、粉薬の製造を正しく判断することが出来ます。というのも専門家たちは、もしも明瞭に言うことが要求されれば、無理をして言うことは良くありますし、現に起こっていることでもあるからです。同じ方法で陪審員は医者への報告に従って、その責任ある地位で評価することが出来ます。もしもシチューが焦げたなら、料理人でなくても良く匂います。次に、この小さな災いから私は身を守るようになり、厨房に入ることにさえしません。何故なら私は料金を支払っているのですから。お金を支払っているのは国民です。そして、その代表者たちは国民が十分なサービスを受けられる方法を沢山持っていて、

代表者たちは大変単純にそのことを望んでいます。

人はもっと申し分のない分業を望むことさえ出来ますし、代議士たちは原因を探らずに何よりも結果に従って判断します。大変なお金持ちで多忙な人間は何台も車を持っているので、故障を知りません。彼のやり方は、初めて故障した時には十分にお金を支払うことであり、つべこべ言わずに運転手を帰すことです。そのことは彼にメカニズムを学ぶことを免除しています。

(一九一二年十月二七日)

(1) 『実証政治体系』(一八五二~四)の中に書かれていることを指すものと思われる。

党派の統合には〈反対派〉との意見の一致があります。社会主義者たちが統一されているのは、物事の現状を精力的に否定する彼らの政治活動を制限しているからです。しかし、もしも彼らにやるべきことがあったなら、彼らが分かれるのをあなたは見るでしょう。でもそれは単に、三つとか四つの党派に分かれるのではありません。それは純粹にアカデミックな幾つもの形式を既に予想させています。しかし、現実の問題や解決というものについて、個人個人は必然的に自分の判断する力を回復します。それは右派の党派にとっても明白なことです。以上は、急進的な党派の統合が不可能な理由です。

労働組合員の教員たちと大臣の紛争を考えてみましょう。基本的な問題には殆ど興味がありません。教員の労働組合員たちは、法律によって認められていることを前提とします。彼らにとって、そこから生じるのは何でも言うて行う権利ではないのでしょうか。でもこの権利は誰にもありません。実際にはシャンベリーの大会記録とその議論になるのですが、決定された行為について判断することが重要です。党派の形式化は何も生みません。公立学校友好同盟の設立を前提としてみましょう。この同盟の会員たちは教員に関する議論に先ず賛成することを、私たちはそこから理解しませんか。いいえ、全くそうでないのは明白です。彼らは先ず、教員の義務と権利を規定する決まりを探しているのでしょうか。それも本当のように思えません。あるいはその時の決まりは、根拠がなく極めて空想的です。

しかし、形式を発見したと仮定して見ましょう。教員の議論は、ルールに一致しているとかいないとかを判断しなければなりません。その上で争うのです。公立学校友好同盟はその上で意見と調査を確立すべきであると仮定してみましょう。更に、会員一人ひとり自分が知っていることや良識に従って、自分自身で判断すべきであると言わなければなりません。それは、二フランとか三フランの会費を支払うから、判断するのに絶対に間違わないルールを持っているではありません。そのようなルールはありません。判断するのは人間でなければなりません。

私は、〈平和〉と同じだけの〈同盟〉がいると言います。それはあらゆる種類の戦いを萎れさせるのに有効です。非常に有効です。同様のやり方で、社会主義者たちの集会も使用者の賃金搾取というものを萎れさせるのに有効です。しかしこれらの方法は、特殊の場合には現実の解決を決して全て与えません。例えば戦争については何らかの場合に暴力が唯一の頼みになり、もしもその様な挑発とか不当な攻撃を武器ではね返さねばならないとしたなら、知ることが大切になります。その上で争います。同様に、協調的な部下たちが搾取されているか否かを調べなくてははいけません。そして、人間による人間の搾取というものを何よりも非難することから始めたとしても、この立派な原則も特殊な場合を調査する時は如何なる光も齎しません。対立する二人の訴訟人が、その原則に同意することは殆ど何時もありますし、あり得ることです。「一人ひとりがそうあらねばなりません」。彼らは、自分に原因のある意見については対立しません。誰も勇気には軽蔑しません。しかし、一方の一人ひとは言います、「それは勇気なんかではない。盲目的な狂った怒りだ」。自由思想家たちは、思考は自由でなければならぬということで意見が一

致しています。それでいながら彼らは、狂人のたわ言を真面目に取り合いません。一人ひとりが事実に従って判断するのであり、原則によるものではありません。要するに、党派の原理を受け入れる有権者は判断しません。完全に何も主張しません。彼は白紙委任状を与えているのです。彼は放棄しているのです。

(一九一二年十一月二日)

郡選挙を考えた時、私は昔の歴史話となったノルマンディー地方の歴史に戻りますが、それはパナマ運河会社に関する汚職事件です。今は済んだ問題で落ち着いたもののように話せます。ペルシュ地方は大変に閉鎖的ですが、馬取引で大変に豊かで、保守的なものには寛大で、余所の人には歓待し、極めて理屈っぽく、政府や知事が嫌いで、純粹に頑固な聖職者支持で知られています。その頃は代議士も善き青年でした。そして大変上手に批評する或る種の善良な精神を持った同郷人が沢山おりました。人々はそのことを誇りにしています。つまり馬の調教師たちは、全てを正確に言えば意見を持っていませんし、自分たちの代議士を信頼するのはその中の一人を頼りにするためです。以上は郡選挙のことで、あなたが言うことです。実際に悪賢い人間は自分の主張を腹に持っていますし、自分のものとして形にして行きます。

ところで彼は先ず、ナポレオン主義者になったのですが、彼らもナポレオン主義者になりました。その次に左翼の小さな活動を行い、共和制を受け入れるのは正しいと判断しましたが、自然と保守主義者になります。彼は一票も失いません。その上で彼は言います、「彼は自分の地盤を持っているし、武器もある。彼の有権者たちは、支持者であったが、市民ではなかった。如何なる厭らしいメカニズムによっても数少ない陰謀家たちは、自分だけの利益で政治を行い、省庁に働きかけているのだ。彼は郡の小暴君でしかなかった」。それは表面的なものです。全てがそうではありませんでした。陰謀家たちは、彼を言葉巧みに省庁へ売ったのです。彼が〈帝国〉と言ったら、それは正しかったのです。彼が〈共和制〉と言ったら、それも正しかったのです。しかし、何時も同じ環境ではありませんでした。

その時は、パナマ疑獄の暴政でした。問題になった代議士は疑われ、告発もされました。彼は自分を上手く守りました。私が正しく思い出したなら、彼は自分のジャーナリストとしての仕事が僅かな利益を幾つか証明していました（というのも彼はお金持ちではありませんでした）。彼は無罪放免されました。他の人々よりも大目に見られました。しかし、この郡は何も赦しませんでした。非難も不平もありませんでした。それより悪いものでした。それは沈黙と無視でした。そして付ける薬はありません。真面目に政治をやっていないように見えた人々の無情の判決と自由な精神を人はそこに見ることが出来ました。言葉を軽視すると、事物がはっきりと見えるようになります。彼らは如何なる旗の下でも構わず、〈財界人〉が将来を案じて本物の独裁者になったという感情を抱いていました。そして、もしも一度、金満家に敬意を表したなら、その反対姿勢は法螺でしかないということでした。私には郡の役人根性の腹が見えるようです。彼は皮肉屋です。原則には忠実にやるでしょう。彼は全く政治的な陰謀を非常に馬鹿にしますが、誠実さについては厳正です。偉大な冒険者たちは心の底から彼を憎み、軽蔑しようとしたのは偶然ではありません。その賭けははっきりしています。その勝負は、〈政治家たち〉とその地方をお互いに拘束しているのです。

(一九一二年十一月七日)

大多数の人々は、平和を愛しています。それは秩序や平静が好きであるからで、恐怖心からであるとは限りません。もしも秩序や平静を愛することが、少なくとも自然でなくなったとしたら、動物や事物よりも優れている人間の主権は不可解なものになるでしょう。戦争は至る所で行われているのではないかと言う人々が、その証左として提示するのは怒り、暴力、憎悪、敵対関係、謀略ですが、一方的な偏った議論をします。それと言うのも最早、戦争をやる人間位、泥棒や遊び人よりもたちの悪い動物、つまり自分を世界の中心と見て全て自分の都合の良いように見る人間はいないからです。そのような人間は多分、皇帝としては都合が良いのですが、一兵士としては都合が悪いのは確かです。戦争は、神秘的で叙事詩的事件であり、青春の若さであり、酩酊であり、狂気であり、少しも自分を愛する精神の反作用ではありません。それは明白です。従って、人間の情熱というものは犯罪的でさえあり、情熱に対する正義や治安が発揮されることは、戦争においては奇妙なものとなります。戦争をより正しいものにするのは正義であり、叡智であり、詩人たちであり、それらが最後には人間の最も美しい特質を明らかにしてくれます。動物界には決して戦争がありません。つまり決して平和もありません。只、蟻たちは除外します。しかし、蟻たちが与える協調の精神、つまり平和の精神は見習いましょう。平和と戦争はお互いに似ています。反対に、弱さと平和は動物の獰猛さと戦争のように、似ても似つかない関係のものでしかありません。

それ故、大部分の人間は平和を愛すると言われるとき、それだけで戦争の惨禍から大変に縁遠いところにいると言えます。そのような人々は、戦争を決して望まず拒絶することさえあるのは本当です。例え事件が起きて戦争になろうとしても、少なくとも戦争だけは回避します。戦争は権力への服従によってしか始まりませんが、服従は平和の美德でもあります。人間が現実の自分自身とは別のものを愛さずして、戦争は続けられません。ところが平和を生むのは、本質的には詩です。秩序とは、人が愛する愚かなことを常に自分に禁じて我慢することによってしか維持出来ません。そこに達しない者が泥棒であり、人殺しです。それ以外は、前述したように出来の良くない兵士です。

それ故、戦争という最も荒々しい敵兵が、何度も戦争を見せてくれることは余りに容易なことであり、彼は何時も戦争をしています。そして、より優しく正しい品性は自然と戦争から遠ざかっていくと信じることは、恐らくそこに根本的な間違いがあります。人間は社会的になれば成程、好戦的になります。平和主義者であるあなたも、明日は戦争を起こして、大変な野心家になり、駆け引き上手になって、思い通りに嫌らしい役を演じるのでしょう。それ故、現実全てが公権力に支配されます。そして事実として、現代は王の権力に最も恋々としている時代であるのが分かります。それは神秘的で、閉鎖的で、秘密だらけです。そこでは、全てを音便に済ませる平和主義者の努力が払われるに違いありません。それと言うのも支配者たちの悪徳と情熱は、人間の力の中で最も純粹で最も気高い殺戮に向かわせる恐ろしい力を持っているからです。ヴォーグナルグ (1) の光輝く言葉をもう一度ここに引用してみます。「悪徳の人は戦争を煽り、美德の人

は戦場で戦う」。

(一九一二年十一月八日)

(1) ヴォーヴナルグ(一七一五～四七)はフランスのモラリストで、『省察と箴言』の著者。雄弁や対話を信用せず、独立した批評家として古典主義作家に倣って書いた。

恐らく将来は、今の国民を理性的にしている物足りない演説に代わって、次の様な種類の議論で首相の演説を討議する〈議会〉なら人は理解するのでしょうか。

その政治家は言いました、「皆さん、私はあなた方の感動や憤慨を感じています。私に襲って来る情熱の波は、一週間以上続きます。国民は動員令に秩序を期待し、望み、要求します。現代の法律は正しく、全てに網羅されています。更にその上、非常識な挑発的言辭が国の名誉そのものを傷付けています。この種の威圧的言動にあつて、もしもそれを少なくとも国民からの委託と見做すなら、誰が抵抗するのでしょうか。私はそれでも待つて、時間を稼ぐことに決めました。あなた方は私の言うことを聞くことなしに、私を追い出さないでしよう」。

ここには信じられないような演説を中断する激しい気持ちがあります。十分な論拠のために狂ったようになるのは極めて快いものですし、理性を越えて情熱が高く舞い上がります。しかしその政治家は健康を維持します。自分の怒りに備えるのも同じです。

彼は言います、「私は、人々が私には勇気がないと言って非難しているのを分かっています。その悪口は私を深く傷付けます。しかし、国民の全ての情熱に抵抗することを私が決めた時、私は自分の情熱を押さえることも誓いました。私が考えるに、それは戦闘に人々を駆り立てることよりも、極めて少ない勇気です。もしも私が個人的に扇動させられたなら、銃を撃つ恐怖が理性の形を成していないかどうかを私は理解していなければなりません。そして多分この策略によって、怒りがそれを奪い取って行きます。しかし、私があなたの頭であり、少なくとも理性であることを私は意識します。あなたの情熱も私の情熱も、自我と見做しません」。

彼は言います、「そうです。この同じ瞬間、二つの盲目になった国家の興奮の中でも、私は平和を信じます。私の力が及ぶ限り、平和を望みます。何ですか。ここでもあそこでも既に多くの人々が正しい意思を捧げていますし、自己を犠牲にしています。それが唯一の命令ですし、一族の絆というものは断たれています。多くの人々が自然に打ち勝ち、自分自身よりも貴重で高価な何ものかのために死ぬのでしょうか。そして、同胞愛という崇高な運動は何かを支配する処まで行かないのでしょうか。同情とは逆で、誤解があり、余り熟慮されない言葉なののでしょうか。これらの悪は想像の世界のものです。明白な生活や仕事は、今日のように、昨日のように行うことが出来ます。明日使う犁を止めるのは何もありません。各々の人々が今日のように息をしますし、生きて行きます。もしも少なくともこのペンでサインしなければ、もしも私が書類を台無しにしたならば、もしも私の抵抗が絶望的でもあなたが私に託したのものよりも凄い力を或る日私が保持したならば、平和が一日以上継続出来ることを経験から人は理解します。私は多分、十万人の人々に一日の生活を与えるこの奇跡を生みます。あなたの美德は不満を呟きます。しかし、私は私の罪しか見ません。私には最早、公式も計画も制度もありません。でも〈ノン〉(否)を望む行為はあります。私は〈ノン〉と言います」。私が私の国を大変に愛しているのは、世界で一番であると話をしているフランス人でいたいと願っているためです。そして、どんなことが起ころうとも、そう願っています。

(一九一二年十一月十日)

神秘的であるよりも現実的である小さな村において、私が知る限り、土竜塚に屢々迷信的な信仰を表しているのを私は良く聞きましたが、それらは死の前兆であると言っていました。曖昧なこの教えに基づくその関係は、直ぐに経験によって砕かれましたが、その様な地方においては土竜は大損害を与えていました。従って善き女房たちは、前兆の代わりには多少なりとも土竜塚は幾つかなければならないと言っています。しかし、その数については決して一致しません。以上は、神学的理念からの概要であり、直ぐに大変に微妙なことで、経験では分からないものです。

しかし、それにも拘わらず、その関係は更に何か自然な基礎があらねばなりません。さもないと皆に共通した想像力は決してそのことを持ち続けません。ところで私が真っ先に気付くことは、土竜塚の光景は不愉快な予想の推移において園芸家とか農夫の精神を放棄していることです。愉快な出来事は、不幸を齎す前兆と見做すだけです。人はそのことを笑うでしょう。果実が沢山実った村とか、豊かな収穫とか、上手に結んで投げられる出来たばかりの束とか、風に耐える麦藁の堆積が公私の不幸を意味しているとは誰も何処でも言いません。塩が非常に高価であった時代でした。そういう訳で、倒れた塩入れの上には迷信が幾つもあります。

私が考える実例は、その上に想像力のための繋がりを見ますが、既に悲しいイマージュへ導いて行きます。というのも、土竜塚と最新の墓には似ているものがあるからです。イマージュによるゲームが、ここで私たちの脳に或る種の踏み固められた小径を作る必要はないのです。しかし、特に信仰は有益です。要するに自然に土竜塚や土竜を消失させるようになるのです。極端な未開社会の風習には、この種の信仰の例は沢山あります。それ自体が可笑しなものですが、結果として現実的には英知である規範と一致しているのが分かります。そのことは人間の本質としての特色をくっきりと浮かび上がらせているものです。人は興味あるいはものを容易に忘れませんが、情熱の感情は決して忘れさせてくれません。

原始時代の大部分の文化において、妊婦には奇妙な風習があります。お腹が大きい間、その子の父親は試練や断食を受け入れて従います。そして、純真な神学に従って父親は、結果的に健康や美德に従って子供を作ります。しかし、もしももっと正確にそのことを見るなら、この清めの制度は結果的に男の欲望を鎮めて、妻が必要としている休息を保証するようにしているのは自然であることが分かります。その他の習慣は情熱を鎮めて群居することが出来るようになるのが狙いです。例えば出産という最初の苦痛に父親は儀式によって自分の帯を緩めて小屋の回りを回り続けたり、あるいは同じ様な動きを他へ行ってやったりして、妻との共感や希望を引き起こしています。従ってこれらの信仰というものは同時に、外部世界との関係においては無知であることも十分に眼に見えて分かりますが、人間の本質として既に深い意識となっているのを示しています。

(一九一二年十一月十二日)

文明の進歩を大いに遺伝に帰すのでは余りに平凡です。言葉はお金のように信用によって流布します。もしも乳児が、人間の誇りの尊重とか思想の自由を既に相続されていたとするなら、私たちは野蛮とか迷信とかからいち早く遠ざかったのは明白です。しかし、そんな意見は少しも真実ではありません。相次いで成功する人々が、一定の物理的環境に益々上手に適応していると考えerことはあり得ます。今は同一の原因が連続して影響を及ぼしているのです。例えば最北端のラップランド人の家は寒く、黒人の家は暑いです。しかし、社会環境の適応が大変に一定しているとか変わらぬ痕跡を残して置くようには見えません。何故なら、何よりも風習は著しく変化しているからです。従って社会環境による行動も同じで、その結果状況によって大変に変わるからです。スーダンでは、太陽は皆のために輝いています。しかし私たちの社会では、富や余暇や文化や安全は非常に不平等に配分されています。優しさや弱さや怠惰は、憎悪や激怒や暴行が百メートルの処で相関的に広がって行く間に、ここに広がっているのだと理解することは出来ません。しかし、この見方は既に多くの虚構を含んでいます。お金持ちの子孫は再び良く貧乏になります。それに反して貧乏人がお金持ちにまで出世して身に付けた地位はまさに失うに違いない立場であり、一人ひとりが捨てていることを私たちは十分に分かっています。そして結局のところ私たちは二人の両親、四人の祖父母、八人の先祖の血筋であり、そのことは生まれたばかりの子の一人ひとりがこの混合によって中間的な人間になっているのは、大変良くあることを分かせてくれています。天賦の才というものは、自らは発展しないことを付け加えて言います。要するに新しい世代の一人ひとりが無知と未開の儘でこの世にやって来ると言う時は裸の世界に来るのと同じで、多くの真実から離れているわけではありません。

新しい世界である森林地帯において、そして恐らく私たちの家も同じですが、農民たちは雌牛が子牛を産むために逃れる時、鹿とかのろ鹿のように若い動物は野生に残っているのを知っています。私はその指摘をダーウィンから見付けましたが、それは十分に私たちの状況にも明白なことです。何処かの無人島に取り残された人々のことも引用されますが、彼らは何年かすると殆ど衣服を着けなくなるように、人間性というものを忘れます。風習の不安定さを把握させるための神話そのもののようなこれらの話を考えることです。

もしも仮にこの考えを取り入れて、探検用の道具のような物を作れば、その時は良く知られている既定のことでなければならぬものとして理解しますし判別します。貧困による最初は墮落であり、怠惰とかアル中です。その次は、例えば演劇においてはパニックとか恐怖心であり、そこを逃れた人々は屢々野獣のように行動します。その間に、彼らと同類の人々は、至る所に駆けつけて、英雄のように行動します。結局は情熱や戦争なのです。乳児のことはその時、何と云うのでしょうか。それ故に私は、歳を取って合理的になり、何世紀にも亘って賢明であった人間性というこの虚構を理解しません。私は寧ろ、殆ど裸の精神や心でこの世にやって来て、肉体のような一人ひとりの人間を信じます。教育が全てを作ります。殆ど全てを作ります。それは大建造物や文書に基礎を置いた学問や芸術によって進歩が保存されます。本能による活動を信用しない

ことです。

(一九一二年十一月十三日)

オーギュスト・コントの思想には、全く健康的で力強いものがあります。殆ど今でも新鮮で、この〈教会権力〉とか〈聖職〉がきちんと均斉の取れた普遍的な学問に基づいて設けられていることを私は近頃考えました。しかしそれは昔の教皇政治や宗教会議が将来において望まれていたことです。思想は正しい。しかし、その思想を勧めるように考察しなければなりません。

現代は学者たちに支配されています。戦争、航海、土木工事、財政、学校、裁判において、所属の長たちは比類のない専門家であり、彼らは知的に万全な準備後でないと独自の調査研究に入って行きません。私は個人個人を判断するのではありません。彼らには個人的には美徳が与えられていますし、職業も与えられています。しかし、そのシステムは〈官僚主義〉であり、寛大さも自由も確かにありません。従って、先見の明もありません。つまらない仕事や論争や対立において気難しい気分になります。知性は、思索と行動の間に漂っています。つまらない方法がやる気をなくしています。社会生活は余りに押さえつけられています。外交精神は会話で進展しています。慎重さや秘密は、悪口や下らなさへ行く傾向があります。高級官僚へ聞いて下さい。あなたが見るのは、殆ど何時も懐疑論者の冗談であり、戯れて軽蔑することであり、極端な疲労感です。

ところがオーギュスト・コントが大変に良く理解していたことは、そこに二つの基本的原因があるということです。第一は〈専門化〉です。それは予想することを非常に困難にするもので、精神を参らせませす。詳細や緻密さには決して限度がなく、特殊な学問だけに関係するものです。そして限りなく小さなことに重要性を与えるようになります。それは数学における直線のようなものです。その努力は、全てが誰よりももっと良く確実なことを知るのが目的です。現実を麻痺させる力を与え、殆ど知的世界の秩序における探求が今日では専らの目的です。オーギュスト・コントはこの〈戯言〉と〈アカデミーの退廃〉を暴いています。〈教会権力〉は、まさしくこれらのものに対峙しています。それは本物の〈文化〉という思想を創る無数の考えを持って、暴君に対峙しているのです。そこでも様々な知識は厳格に計量されて均衡がとられて〈社会科学〉となり、他のものも体系づけて最後には〈倫理〉も支配します。つまり〈正義〉と〈不正〉についての考察になります。数学者が〈文化〉の中心であるかの如く、大変厳格に主張して来たことは非常に驚くべきことです。「詩の傑作における限りない探求が何時も人間の問題に関係している」のです。

第二の原因は、〈教会権力〉を墮落させることです。それは世俗の力です。現代の官僚たちは、昇進や懲罰で管理しています。その機能は、策略や陰謀という精神や個人的情熱というもののうちで、非常に増大しています。〈学問〉はその時、支配の道具になります。現代の哲学による本当の〈教会権力〉は、少なくとも精神的なものです。考えを明らかにして、つまり少なくとも言葉や文章によって行動します。そして、それがローマ教皇や司祭や主任司祭になり得るものでした。倫理面での自由意思です。矛のついた槍はなく、監獄もなく、火刑台もありません。しかし、カトリック教の権力者は武器を祝福しますし、勝利者を称えます。ドレフユス事件におい

ても〈教会権力〉が発揮されました。そしてジョレスの政治力は、同時代に極めて弱くなりましたが、彼は優れた〈文化〉の特権を一度ならず何度も理解させてくれました。それは何時も倫理面での要求によって支配されているものです。

(一九一二年十一月十六日)

(次章へ続く)

文筆活動の開始を決意した人々の国で、大虐殺後の良心の呵責や恥の感情の動きは当てに出来るのでしょうか。私には分かりません。しかし、ブルガリア、セルビア、ギリシア、モンテネグロのエリートの人が、今は大地を豊かにしているのを疑う訳にはいきません。彼らは最も若い人々で、最も強く、毅然として、献身的でした。収穫期には肥料代はかかりません。しかし、その他の行動が取れるのでしょうか。取れます。何時でも攻撃を期待し、恐ろしく責任ある役を誰かに任せることも出来ます。ヨーロッパには最早ならず者の国民はおりません。一八七〇年に、ビスマルクの外交手腕というものが、私たちには非常に戦争を意識させるのに利用されていたことを忘れてはなりません。実際にこの事例は、政治家が職務を果たして、外国の大砲が甘受して発砲して戦争を告げることに期待するのを自分自身で誓うのに十分です。

しかし、統治者たちの裡では、大変に下品な或る種の二枚舌を使うようにしています。彼らは言います、「戦争を望んでいるのは国民自身である」。戦争を望んでいる国民は、恐らく仕事がなく遊んでいる市民の集団や熱心に働いているジャーナリストを減らすだけでなく、軍人精神が余りに容易に大袈裟な演説によって平和な時代において熱狂的に賛美され称賛されて、大変に一人悦に入っていることも言わねばなりません。私はリセの生徒だった頃、言葉巧みな愛国者の演説を聞きました。彼には他に手段があるのでしょうか。感染する感情、最も崇高な勇気の喚起、危険な行為の魅力が混同されもする確信、それらは全てが若い青年たち聴衆と演説者の興奮を崇高な処まで容易に発展させます。私は、或る泌尿器学教授が就任記念講義を終えるに当たり、彼の若き栄光と仕事を〈祖国〉に勇ましく提案したことを、昨日の新聞で読みました。拍手喝采されることは間違いありません。しかし、反対に彼の高邁な職務において全ての人々が冷静な自然や平和への芸術の勝利を祝うために招待する時、彼は敢えて称賛に値する人間でしょうか。

私は学生だった時、著名な教授の話の聴きに行きましたが、彼はカントの哲学を授業に取り上げていました。始めにドイツ人哲学者のことをフランス人に話しに来たことを謝っていることを聴いて、私はびっくりしたことを敢えて言います。彼は慎み深い言い方でした。我が国の敗北と正当な希望を暗示しているものがありました。そして彼は更に授業を終えるに当たって、自然なことですが、哲学や倫理の高度な研究には決して国境がないことを主張していました。かすれた声でしたが、その声は感動的で力強いものでした。その授業は大成功でしたが、私にとってはその思い出を思い出すと何度も激しい軽蔑の念を抱くのです。最初の断りの言葉は、完全に必要がありませんでした。戦争以後にソルボンヌでカントについて話されたことは十回とか二十回もありました。好戦的な熱狂の感情を話の外でなだめて言う術を使いながら、おもねって言ったり興奮させるそのやり方は〈政治家たち〉が昔から良く行う伝統的なものでした。ブルガリアとかセルビアの演説者たちは恐らく、その様にして意識を殺人に向けます。そしてどんなに些細なことでも疑ったりしないのです。感動で人から好かれ喝采されることは、演説家にとって正しく高貴で合理的でなくなるのでしょうか。そして、アカデミー・フランセーズは同じ日に満場一致で、敵の前面で指揮する将軍を選挙しないで、私が話したこの演説家をまさしく選んだというのでし

ようか。

(一九一二年十一月十七日)

私は昨日、大変に面白い論理の本を読みました。「自由でいなければならない。それが最高の義務である。一人ひとりがその様にお互いに振舞い、そしてその様に先ず認識し合うべきである。私は女性に欲望を感じている。回りくどく言わないで先ずそのことを自分で認めなければならないし、人にも白状しなければならない。反対に、もしも私が自分を隠蔽して、例えば何かのことについて私の考えを逆にしたなら、私自身は偽善者であるが、喜劇役者の美德である。この見事な方法によって誰も自分自身に代わる者はいなくなる。誰も今の自分を人に見せることはない。そこから最高の美德は何時も他人というものを殺し、道徳が道徳を壊していることを人は知る。良き習慣においてはそれ故に、全ては恐怖や偽善や礼儀正しさに帰している。例えば私は善良でありたいと思う。しかしそれが、私はそうではない証拠であり、私の親切は他人を欺くための仮面でしかない」。

この理論は、心理学と呼んでいるものを非常に良く定義しています。それは自分自身をあるが儘のものに見做すための努力です。しかし、それは不可能です。先ずはあるが儘と一緒にしなければならないので、考えたいものは何もありません。もしもそこに落ち着くのなら、心理学から生まれるものは一種の怪物です。というのも人間の性格は、本質的な点では情熱を制御する内的な秩序の保持にあるからです。多少なりともそれは理解されていますが、顔が赤くなる欲求の秘密の働き、少しも良識に叶っていない欲望や子供っぽい怒りの働きに反対する大人もおりません。保安というこの機能を断念する者は狂っています。ほんの暫くの間、その保安を一時中断しようとする者は、まさにそれと共に誠実な考えの元に自分自身を酷く傷付けて悪化させます。最早、全てに誠実でなくなり、正直な観察者でもなくなります。その告白を実践することは危険な緻密さを訓練し、殆ど火に油を注ぐように、確信罪に良心の恐れを投げ入れたのです。

幾つかの例を見てみましょう。或る男は、戦争に賛成して戦争への愛を自分の中に認めます。健全な道徳によれば、この働きは理性と意志によって直ちに取り消されます。しかし、もしもあなたが物事を科学的に観察する欲求に従ってばかりいたなら、あなたはそれで生きるしかなく、あなたは戦士になります。要するにあなたが好きなのは、自分の性格や性質を甘受することです。しかし、あなたは大切なことも忘れていきます。全てを言うための人間の真実です。それはあなたを変えるための努力の中にあるものです。あなたは言います、「私は激怒とか熱狂の感情の働きを乗り越えることが出来ない。悲しみや憎しみにも勝つことが出来ない。ご覧、それらが規則正しく自然と大きくなって行く」。もしも人がそれを真実のように思ったなら、大変な真実です。それを否定してみても、最早真実です。そして、鉛の球とか木片のように私の性格は対象の性質によって区々になります。私はそれらのものをあるが儘に甘受しなければなりません。ところが私は、あるが儘の私自身を受け入れますが、それは私自身でないものを手に入れているのです。卑怯者たちの詭弁なのです。

(一九一二年十一月十八日)

戦争の技術は恐ろしい完成に達させられています。戦争の技術によって、主として武器の発明や調整を私は欲しません。弾薬や食糧や部隊の輸送は、敵を包囲するとか分断するのを目的に予め計画するのでもありません。それは昨日まで平和に暮らしていた両国の人々を、お互いに対立関係に投げ入れる悪魔の技術です。明日は平和に生活するのであると私は理解しています。国家元首や外交官は、議論を取分け大変長く続けることが出来ると十分理解させてくれます。人が望んでいるように白熱して、両国民の実際の関係である交流や旅行や歓待や援助を変化させることなく、民事訴訟と同じであり、国境を接する隣国と仲良くなって絶えず問題を解決していることです。

国境では各人としては先ず、お互いに戦う時のことを想像しますが、そこでは友人たちであり、同盟国であり、要するに双方が助けを呼ぶ頼りになる保護者であり、公的な戦いは私的な戦いの結果であり、時には恐らく未来のためには最良の平和を確信しています。しかし、現在は西洋諸国の国民は平和から戦争へ移行しなければならなくなるでしょう。政令もそれに必要なことを満たさなければなりません。そして同様に、その様な戦争はあり得ないと大部分の市民が信じるようにもなります。最高に危険です。

動員命令はその後のことです。或る朝突然に來ます。誰もがやるべきことは分かっている、直ぐにそのことを考えます。その様な状況の中で次の行動は熟考を妨げます。着る物や履く物や残された者たちのことを考えなければなりません。急を要するこれらの行為は、それ自体は危険でも困難でもないですから、殆ど全てのことが行われます。従って難しいことはなく、国民全体が今後は避けることが出来ない悪に向かって大きな一歩を踏み出したのです。

その最初の結果を良く考えて下さい。健康な男たちが、家族や友人や職業から遠く離れます。既に、平和の絆は断たれています。いかにもありそうなことですが、或る人々の嘆きが残して來たもの全てのことをより活発に考えます。しかし、何の反応もありません。何故ならその不幸は同じで、全員に共通しているからです。それに毎日の複雑な労働も付け加えましょう。疲労と空腹は欲望を変えます。食事と睡眠の問題が、大変に早く唯一の現実の人間の関心になります。それと共に精神の自由というものが、平和の時の気がかりと兵役志願が突然に無くなることから生じて來ます。各人は予想することが許されることから精神の自由が生じて來ます。個人の情熱はその様に食料でないことが分かります。唯一それによって集団の情熱も計り知れない力となります。彼らは最早同じ人間ではありません。彼らが行く後には、橋が切断されていました。それでも彼らには決して悪意は無い儘であり、彼らを待ち受ける敵へ先に銃剣で飛び込むことはありません。最初に先頭に立つのは砲兵です。一人ひとりが良く決められた役割を持っていて、時々目標地を見ることさえない照準手までそうであり、戦争は射撃演習場での演習のように始まります。何かの後で怒りが走り出します。

(一九一二年十一月二日)

このバルカン戦争には恐ろしい教訓が隠されています。ブルガリアの最も優秀な若者がいる連隊が、殆ど全滅したと最近語られていました。その件は信用出来るものです。最も教養ある若い人々のうちにあるのは、気高い理性によって説明される戦闘への情熱です。彼らは話をしましたし、説教もしました。彼らは約束を果たさない儘ではいたくありません。指揮することを志している者は全てが、自分だけの方法による服従を熱愛しており、既に陸軍中尉が自分自身で栄光に思う將軍を自慢するようなものと確かに同じであると言いましょ。結局のところ、まるで哀れな人々の裡と極めて同じであり、言葉を言わない禁欲主義は教養ある人々には恥ですし、もしも彼らが最も気違いじみた無鉄砲のお手本を示していたなら、彼らの野心は永遠に台無しになります。敵の砲火にこの優秀な若者を晒した將軍をブルガリア皇帝は降格させた、と言われております。もしもこの坂を下って行ったとしたなら、勝者の陰気な思考は何処まで降下して行くのでしょうか。今ここには危険人物がおります。理性の働きは、この一連の不幸から私たちを免れさせました。しかし、動員を命じる人間は自分がやっていることを分かっているのでしょうか。

悲しいかな、彼は歴史の本を読みました。その歴史は美化されて書かれておりました。もっと正確に言うなら、歴史で全てが満ちている言葉の後を追うしかない病人や飢えた人や負傷者や死者たちのための知識で書かれています。私は昨日、或る歴史家の言葉を聞きました。彼はバルカン戦争のことを話している時に言いました、「その光景は慰めてくれる何かがある」。多分、それは既に死体の匂いをすっかりきれいに取り除いて、何かの美しいことが書かれた本の頁になっていました。飢えやペストの流行を防ぐ私たちに、確信されている勝利である平和の組織化が今後は、戦争という実際のイメージを前もって形づくるのを不可能にしています。私たちはそこに男の遊びしか見ません。演習や軍事パレードは、大変容易に英雄主義を育てます。アカデミー会員は語調を強め、挑発する言葉を皆に発します。この奇妙な演説は、口笛を吹く人も少ないので上出来です。その戦争を良く知っているこの將軍が立派に〈平和〉を称賛することを私は期待します。彼は思い切って言うのでしょうか。

しかし、これらの予断においては、恐らく流行とは別のものがあります。〈平和〉も或る種の戦争です。不平等や悪用や暴政に対しては〈戦争〉があります。一度鎖が解かれると、ご存知のように独自の理屈で別の戦争が広がって行きます。〈平和〉も一度鎖が解かれると、敢えて言うなら独自の目的に自らの方法で行くとも言えます。それは正義です。戦争に対する唯一の思想は、全ての不純な計算を検査するのを止めます。戦争そのものが全ての規定です。でも向こう見ずな〈冒険家たち〉を無視しましょう。エリートとは決して不実ではありません。私はもっと自然で純真であると信じていますが、取分け敵には苦しめられます。自分以外のものを愛さなければなりません。それは健康に良いことですが、屢々お金がかかります。お金持ちや社長やアカデミー会員が正義のことを考えたなら、彼らは正義を愛していると良く感じます。しかし正義という義務は決して休息させてくれません。それらは閉まりの悪いドアの陰で操っているのです。もしも一つだけ部屋の中へ通らせたなら、全てが這入って来て、全員の服が台無しになって炭で汚れ

て仕舞います。それ故に戦争の〈教え〉を長く継続させることであり、全てのドアを閉じることです。そこで心から楽しむことです。「私は一度に全額を支払う」とその〈浪費家〉は言っています。

(一九一二年十一月二三日)

人権擁護連盟が報告書の中で〈比例代表制論者〉になることを葉書で勧めているのを私は考えます。見識のある多くの共和派の人々が、その言葉を使わせた儘でいるのは驚くべきことです。

〈正義〉や有権者の権利のためには、正しい計画が人権擁護連盟の気に入って貰わなければなりませんでした。合理的に考える人が最近何度も私に言いました、「私は全く単純な比例代表制論者だ。何故なら有権者としての権利を獲得したいからだ。私は共和主義者だが、それは大変に明白である。私は、王党派の人が四年ごとに対立候補もなく選ばれている選挙区に属している。私が投票してもしなくても結果は同じだ。私は選挙が無くならないことを要求するだけだ」。理屈としては正しいように見えますが、決して私は同感ではありません。

投票することは、正確に言うなら人権の一つではありません。投票しなくても、安全で平等で自由であるなら、大変に具合良く生活出来ます。投票は、これらの快適さを持ち続ける一つの方法でしかありません。経験は、支配しているエリートよりも百倍も次のことを理解させてくれます。つまりそのエリートは世襲して支配しているのかあるいは身に付けた学問によって支配しているのであり、もしも国民が抑制し懲戒し最後は免職にする権利を行使しなければ、大変に早くあらゆる自由を市民から奪うようになります。私は投票する時、一つの権利も行使しませんが、あらゆる私の権利を擁護しています。ですから私が投票を失ったか否かは重要ではありません。自ら求めた結果が達成されたか否か、つまりそれらの権利が市民としての権利を認めなくなると抑制し懲戒し最後には廃位させられるか否か、を良く知ることが重要です。

例えば人民投票のような政治制度は大変良く理解されています。市民一人ひとりは何時か自由に投票しますが、彼らは権利を良く守るためではありません。従って私は実際にそれ程選択することに執着しませんし、私としてはどんな指導者でも、指導者は指導者でなく、少なくとも国民の奉仕者であることは認識すべきことです。私は、虚構の権利のために現実の権利を変えないのははっきりしています。

ところで比例代表制は、虚構の権利を私に与えているのです。それは私としては、三つか四つの政党の中から、それがどんなに独裁政党であったとしても選択する羽目になります。しかし、私が選択しようが他の者が選択しようが、独裁政党は常に独裁政党に変わりなく、常に私の権利は小さくなります。代議士が新聞とか委員会に依存するや否や、そして有権者に依存するのが少なくなるや否や、自由は危うくなります。私は全ての人々の自由を言っているのです。というのも私が急進的であったなら、そしてもしも急進的な人が指導者であったなら、私が頼めば私は何らかの恩恵を手に入れるでしょう。しかし私はそれを決して自由と呼びません。私が言う自由とは、有権者との関係で選挙された緊密な依存関係です。私が選挙制度を判断するのは、少なくともそのことによります。もっと明白に言うなら、お金持ちたちが既に持っている経済力を、政治力に追加することを防ぐことが私には重要です。ところが現実には、政党や政治家首脳たちと一緒に金持ちたちは支配していると私は断言します。現代の選挙制度に関しては無記名投票や選挙費用の制限のように容易に受け入れられる改善に反して、私たちは大政治家や権威を守り続け

ることしか話さない性急な政治家たちの手綱を締めるようにするのは。その贈り物には有難うと言います。最良の王とは、何ものにも害がありません。

(一〇一二年十二月六日)

## 百四十六 休戦 (ARMISTICE)

大変な誠意から結ばれたこの休戦は、平原を分断し、騎士道的な風習への讃辞がありましたが、最初の時の驚きは僅かでした。その時に虐殺は既に行われたばかりでした。疲労からは落ち着いたのでしょうか。流血による集団の興奮も手当てしなければならないのでしょうか。結局彼らの怒りは果てたのでしょうか。恐らく、もっと良く理解しなければならないのはこの〈至上の平和〉であり、より人間的な理性です。

戦争は憎しみを鎮めます。それは単に疲労や流血によるばかりでなく、戦争の中にある〈平和〉への強い思いによるのです。というのも戦争は、友情や友情以上のものを前提にしているからです。人が思っているような野心はありません。戦う野心が人々に働くのは平和の時です。しかし戦争が姿を現すと、あらゆるものを足元から消します。先ずは人生を諦めなければなりません。そのことは全てがはっきりしている情熱に止まります。彼は完全な平等を確立します。その栄光さえも平凡です。最早人はそのことを考えません。従って一人ひとりの展望は、直ぐに省略されたものになります。賭けるための理性は賭けそのものの前では大変に弱く、その人の全てを占領します。服を脱がせて洗濯し、清めるものがあります。戦闘中に仰向けに寝かされた『戦争と平和』のアンドレ王子の美しい物語としてトルストイはそれを見せてくれています。しかしアンドレ王子は二つの雲の間から青い空を少しだけ眼にします。現実の戦争は、未来の戦争という幻影を消して仕舞います。それは激しい恐怖から消すのではなく、私が信じるもののために消すのです。しかし戦争は先ず激しい恐怖、感動、動物性の全て、憎悪の全てを殺しますから、全く逆です。行動は、独自のメカニズムによって最初の力で清められて動いて行きます。哀れみと共に復讐心が消えます。恐るべきカタルシスです。緊密な同盟関係、何時も変わらない支援、何時も進んでの服従、全ての平和への美德はその儘です。それは物事にとって重要であり、正しい見方です。情熱を追い出した冷静な見方です。その時は平和が容易になります。同様に危険な決闘の後では、悪口は些細なものに見えます。そして戦争は、悪口を生む情熱に申し分のない最高の薬になります。もしも軍人たちが平和だけに適応させていたなら、彼らは恐らく余りに妥協的になることでしょう。バルザックの小説の中に、些細なことで満足する老兵が一人ならず何人も出てきます。近代戦争は、その様な教訓が益々良く適して来ています。征服するためには多分、好きなことは出来ません。

人間についての職業のこれらの貴重な反応も、もしも老兵たちがそのことを決心したなら、平和を保証します。根っからの荒武者がいることも私は認めます。しかしなら彼らの人数は、武装して強化された国家の中では少ないものです。というのも荒武者は命令を守り、あらゆる欲望を断ち、射撃を規制したり、食料などを補給するのには向いていないからです。それらの役割は産業化するものであり、結局のところ平和を望むものです。何よりも先ず優れている無関心さが、穏やかで正しいものとして好戦的な老人を描く時、決して悪人として人は描きません。戦争は決してソクラテスを意地悪にしません。戦争は恐らく、ソクラテスの美德を多くの人に与えました。

私が考えるところでは、恐るべき戦士、意地悪な戦士とは他の戦闘で多く裏切った野心家です。彼は小さな力で人々を行動させるために、自分自身の最良のものを台無しにしました。彼は邪魔者に我慢出来ません。彼は怒りに自分の力を使い、最後には尖った甲冑のように彼に圧力を加える策略を感じます。その様な彼らは、戦争に解放感を感じているのに気付きます。取分け人生が死と共に文句を付ける年齢になり、本当の愛を知らなくなればそうなります。彼らは、〈祖国〉のために喚きます。

(一九一二年十二月十日)

## 百四十七 アナーキズム的か？ (ANARCHIQUE ?)

「アランよ、あなたは何時まで組織に加入しないでアナーキズム的なのですか」。この様に或る誠実な友人が手紙に書いてきました。彼は比例代表制を支持しており、私が郡を重視する理由も良く理解しています。「もしも代議士たちは点検したり監視したりすること、要するに圧政に抵抗するのが唯一の使命であるとするなら、あなたの言うことは支持できます。しかし、それは代議士たちの仕事の一部でしかなく、確かに重要ではないのです。最も高度な言葉の意味において言うなら、代議士は立法者であり、組織の者であり、実際の統治者です。各々の郡には明らかに政治的才能のある人はまずいませんので、私は当選者たちが政党に集まって欲しいと思います。十分に清潔な組織体の計画に従って、最も力強い頭脳によって表現されることを望みます。さもないと私たちは一方の側に荷担するアナーキスト的関心しか持ちません。もっと適切な言い方をするなら、真の進歩がなく、4頭の馬に引かれる力も無力になるようなものです。そして更に、我が親愛なるアランよ、あなたはこの権力の無力化を容易に受け入れています。あなたは心底からアナーキストです」。

以上が、彼の話の内容に殆ど近いものです。そして私は、如何なる組織の全体計画にも手を染めて来なかったことを認めざるを得ません。この種の計画は最良のものでさえ、何の価値もないと私は思っています。私は、紙に書かれた組織も人間の熱も信じません。そして樹木が育つように、やはり少しずつ自然に社会というものが組織されると信じています。化学者は、樹木を育てることを知りません。しかし、園芸家は樹木の形を整えて管理することを大変良く知っております。結局のところ社会とは、存在して発展して変化するものであり、必要性から交換と結合と競争を行います。要するに私には生活の力であるように見えます。私たちは一人ひとりがこの太った動物の中に根付いて、時々窮屈になるか押し潰された状態になって、著作権とか請求権を行使します。世俗の指導者はこの観点から私たち全員を代表していますが、職務と見倣して社会を組織することはないように私には見えます。それは命令して子供にやらせたいと思うようなものです。しかし、社会の圧力に対して個人を守ることはあります。

例えば、あなたは薄暗い通りを横断します。あなたは、前夜に幼い少女をたちを誘惑しようとした怪しい男だと思われれます。辺りが騒がしくなります。あなたは追われ、逮捕されます。調べられて、裁判にかけられ、石を投げられます。そこには悪の象徴であるリヴァイアサン(1)に対する人間の自然な反応があります。自分を搔くことが彼のやり方です。戦争も同じ様にして始まります。それは頑強な動物に味方する賭けでしかなく、恐らく健康にとっては良いことです。しかし個人個人を代表する政府は、これらの自然な反応を持った全ての力に抵抗します。要するに政府は、殆ど個人のように社会を正すのであり、個人の理性によって情熱を立て直します。以上は私が、政治を組織の機能として見倣さない簡単な理由です。愛情が子供たちを育てるのであり、その次に医者が子供たちを治療するのです。

(一九一二年十二月十六日)

(1) 聖書の「ヨブ記」に出てくる水中に住む巨大な幻獣で、悪の力の象徴である。英国の哲学者・政治思想家ホッブス（一五八八～一六七九）は、人間中心主義・生命尊重主義の初めての近代国家論とも言える『リヴァイアサン』（一六五一）を著した。

民主主義精神として最も明白なのは、恐らくそれは個人的で反社会的であるということです。私は自分の考えを述べます。社会は一種の太った巨獣と見做すことができます。それを隠喩として私は理解します。しかしこの太った巨獣が、あなたや私のように現実に存在していて感じて思考していると信じたいと思うのは、神秘的で比喩的です。私たちが思考して感じて望むように、それも望んでいて信じたいのも神秘的で比喩的です。それは神話でしかありません。しかし、自然の力と全く良く似た多くの力が社会的力にもあることを、いずれにしても認めなければなりません。或る種の場合に、殺人者に対して身を守ることは激しいパニック状態に陥ります。無実の人々を大変良く分裂させます。戦争もこれと同じ種類の原因として理解されます。私たちはそのことを余り疑わしく思ったりしません。最も穏やかな人々は突然に戦争状態によって変わります。しかし、それはナポレオン一世が多くの犠牲を払って試したように、緊急的で普遍的でもある平和を必要とするへとへとな状態になる日までに変わります。

私は、或る大物とか演説者への突然の一時的熱狂、集会場で良くある熱気、革命のような妄想、要するに風や嵐のように生まれて同じ様に終わって仕舞う世論の流れというものと同種類の出来事の中で、もう一度整理しています。宗教なら何でも良いのですが、興奮した現象の中で最も良く知られて華々しいものは、良識を殺しています。悪の怪物リヴァイアサンには情念と怒りと疲労と興奮と同情があると私たちは要約して言っています。大きな肉体の衰れな一つの細胞でしかない個人は、これらの活動の中で捕らえられ、持ち上げられ、回転され、移動させられています。私たちは最後には砂漠の砂利のように擦り切れて丸くなるとも言えます。この騒ぎが起こって広がって行く時、その状況は統治者たちには快いもので、彼らは神のようになります。

注目に値するものであるこの太ったりリヴァイアサンはあなたや私です。私たちは小さな部分ですが、全てが文明化されている訳ではありません。それは人々が言うように未開人であったり子供であったりします。やれることがあれば直ぐにやります。彼の魂が一つであったなら、権力と権利を区別しません。彼は約束をすとか協定を結んでサインをするや否や、言葉だけでは決して信用しません。それは少しばかりの猶予を手に入れるための策略でしかありません。歴史は十分にそれを証明しています。集団の精神に照らされた政治家たちは、直ぐに同じ教訓を取り入れます。そして、もしも少なくとも彼らが成功すれば、全てが許されるのが普通です。

ところであらゆる民主的活動は、太った巨獣の反応に反対して高まり、自然な人と人との結合を釣り合わせる傾向があるように私には見えます。兎に角、社会機構は無理にも社会契約と呼ばれた一種の契約によるのです。何故なら、それは反社会的な契約になるからです。その太った巨獣の本能的活動に抵抗して、可能な限り個人個人によって受け入れられた公平な正義の規定に従うことを人々は誓い約束します。その意味において、それは〈民主主義精神〉が〈祖国〉を裁き、戦争を非難します。その対立はドレフュス事件の時代に激しくなりましたが、今でも続いているのです。〈精神〉は〈本能〉からは自由です。

(一九一二年十二月十八日)



善良なる公務員が私に言いました、「アランよ、あなたは殆どの代議士が些細な不正取引や公正行為をして儲けていると判断しても、それで悪事を見抜いているのではありません。彼らが求めていることは殆ど何時も正義です。それが不正であったならば、彼らは大変に酷い目に遭って拒否されますし、私たちにもっと酷く評価されます。以上は、彼らと私たちの現実が如何になるかです。しかし、私は善良な十二人程の元大臣や多分明日の大臣たちのために例外を設けなければなりません。彼らは権力に止まることによって、限りない力を手に入れ、私たちは何も拒否出来ません。そうです、その様な彼らは貪欲な支持者に取り囲まれているのです。もしもその様な者たちが手本になって次々に出て来れば、政体は腐敗します。実際問題として私が言っているようなことは、決して現実のことではありません。しかし、最も面白いことは国民の代表者たちの避けられない一般的な腐敗を、必要な場合には最も上手に論難するのがこれらの〈大いなる不正者たち〉です。彼らしか幅をきかせていない私たちの国には、価値のないものを評価するという危険があるのは事実です」。

私は決して捏造していませんし、その主要な点を忠実に再現しているこの話は、多くの驚くべき重要な点が導き出されます。先ず大変明白なことは、政治家を腐敗させる危険がある権力の行使そのものがあるということです。彼には再選の準備のためとか、再選に便利な選挙区を見付けるには多くのやり方があります。国民の代表者が行政権に直接参加するのは、多くが良くありません。そして多分、大部分の大臣たちは議会の外で多忙な技術専門家になります。このやり方には不公平な特別待遇で有権者を腐敗させるのも少ないです。代議士は遠慮なく自分の調整能力を行使しますし、自分自身が管理されている時代の思い出は最早ありません。

しかし、良く精通した人の話によれば、全く単純に集団の長たちは大きな権力を持つ一人になっているから、彼らが他の誰よりも厳正な正義を忘れる危険に晒されているとしか理解しないのは、取分け誰でしょうか。〈党派〉の組織が国会議員の習慣を健全化することになると、立場を間違えることになります。それは郡代表の代議士たちが利益を不当に手に入れるためよりも、不当をさせないためにより大きな力を持ち殆ど何時も良く選ばれて管理されて監視されている彼らを、不当に告発することになります。それは与えられた業務や友人たちや支持者によって自らを成熟して何人かの巧みな指導者たちを大変に気安くその罪を許すことでもあります。彼らは大変に巧みです。共和国をきれいにして肅清することを誓いますが、せめて慎みもなくがつつした有権者たちを彼らから取り除いて自由にして上げることです。全ての悪はがつつした有権者たちから齎されます。しかし、それらのことを信じるのは誰でしょうか。

(一九一二年十二月二日)

戦争には奇妙な法則があります。何故でしょうか。何故なら優勢になるには、一言で言うなら多くの想像力、希望、感動、精神力を使うからです。従ってそれらの結果は、通常の算数によって計算される必要はありません。情熱によるのです。もしも十一回目に勝利を逃したなら、十回の勝利はどうでも良いことです。我が国においては、もしもロレーヌ地方北部のメッツがもう少し長く占領されていたなら、例えばアルジェリアのシャンジー將軍の軍隊のように地方の軍隊がパリの包囲網を粉碎していたなら、それ以前の勝利は全て影が薄くなります。

ブルガリアを見てご覧下さい。良い例がそこにあります。日一日と勝利の記憶は消えて行きます。当初の衝動は砕かれます。もしも戦争が再び始まったなら、それはトルコの勝利によって可能なことなのですが、恐らく急激な変化に直面し、今までとは反対になって攻撃的になって行くことでしょう。トルコにはその望みを持つことは決して出来ないと良く言われていました。何故なら彼らの組織は不十分で、食糧の蓄えと弾薬の確保をやらないからです。しかし、毎日の流れはそのような業務を整えることを可能にしています。もしも彼らがそのことを行ったとしても、誰がそうなるように準備するのでしょうか。

この教訓は理解されています。ロワール県の第一軍であるクールミエールで、我が国の十六万五千人が三万人と対峙していた時に、ヨーロッパは二つの大軍の陣営に分かれていて、まるで現在のようにもあり、他からの攻撃は敵を忙しくさせていたに違いないと仮定してみましょう。最悪の事態になったとしても、平和は私たちにとって重苦しいものでなかったのは明白です。従って、第二の野营地やあらゆる国境線の至る所での決定的勝利が同盟国にとって想像出来るものでないのは明らかです。私たちは先ず第一に、本当の粉碎という危険に晒されています。よろしい、仮説を受け入れましょう。しかし、最初の成功は全てに当て嵌まりません。敵の熱狂はそこで使い切ります。血統の良さがあっても同じです。ドイツの勝利が、ドイツのライバル国全てを恐れさせると考えるのは滑稽です。全くその反対です。それは全ての力が彼らにとっては戦線に入っている理屈になります。ところで一八七〇年に、疑わしく野心を持った国家と思われていたのはフランスでした。

今日、もしも反対勢力が散らばっていると思ったならば、決定的勝利は最早可能ではありません。粉碎は最早想像出来ず、可能でなくなります。一つか二つか三つの大勝利の後は、全てが再び始まらなければなりません。敗者という重荷のことが何時も語られます。しかし、勝者の憔悴や疲労のことも考えなければなりません。ですから何よりも穏やかで賢明な第二線の部隊は、より市民的と言えます。屢々絶望によって蜂起しますが、勝利によって鎮まることもあります。従って、前代未聞の不幸の後には全ての釣合いが元に戻ります。道は閉ざされています。ジュリアス・シーザーとその運命がそこを通ることは決してありません。

(一九一二年十二月二六日)

憎しみには多くの喜劇があります。私たちが自然の状況や偶然に支配されると、屢々自然の反感と間違えることがあるのを私は理解しています。恰もジュリエットがロメオの鼻に悪い兆候を見付けたようなものです。彼女がカピュレット家である以上、彼がモンテギュ家の者であることを知っています。しかし、〈愛〉はそんなにも愚かではありません。愛は自然の最も生き生きとした活動に支えられ、取分け大変に若い時には法律や慣例を超えています。私の考えを言えば、人間の顔というものは先ず私たちに申し分のない愛を抱かせますが、非常に弱いものです。それ故に負傷者を慰めるとか火事の時に水を運ぶことは真っ先に考えることです。もしもそれらの行動が続けて行われたなら、その種の行動は完全に私たちに幸福にします。そして、この経験はあらゆる宗教を証拠立てるのに役立ちます。何故なら博愛や忠誠心が絶対的的命令で発揮されるや否や、人間という動物は直ぐにバランスを考えて、自然が齎すこの幸福を天から降って来たかの如く崇めるからです。

しかし、一般にこの愛は大変軽いものです。それは話や計画において気に入るものですが、憎しみを前にすると非常に小さくなります。そして憎しみが自然に見えます。そこに罣があります。それは私たちの眼に強烈な印象を与える色彩のように、敵の顔も出てくるように見えます。敵は、青とか赤とかの目標のように憎むべきものです。しかしながらこの同じ顔が、大いに好かれもする他の状況を想像して下さい。

私の最も古い記憶によると、プロシア人の兵士たちが部屋にいるのが見えます。彼らの中に小さな私がいるのです。しかし、もしも彼らのうちの一人がヘルメットを高く掲げていたなら、私は激しく怒ったことでしょう。彼らは賭けをしていました。私は既に一人の本当の〈フランス人〉だったのです。ヘルメットは私を人間の顔に変えました。

エスペラント語とそれを改良したイド語を使用する人との間には、びっくりする程の憎しみがあり、双方から送られて来るパンフレットには悪口が書かれています。そして私は、彼らが自然に敵であると信じるのは十分に分かります。まるで各人が無謬の共感によって〈世界共通語〉に誠実な人々を全て自分の領域に集めて、お金次第で偽善的で下劣で軽蔑すべき魂を、他の領域では拒絶しているかのようです。しかしながら如何なる疑いもなく、分かれたり一緒になったりするのは偶然です。彼らに敵を生んだのは争いです。この例は、戦争が決して憎しみを齎さないことを示すのにこれ以上適切なものではありません。しかし反対に、戦争を齎すのは憎しみです。誰もが敵に対してはヘルメットを被りますが、皮と鉄のヘルメットではありません。憎しみも一緒に取り除くことが出来ますし、悪い望みと犯意で出来たヘルメットです。誰もが捏造された他人の意見に従って憎みます。二つの仮面は、二人の人間に嫌悪を催させます。従って、憎しみは決して彼らの心の中ではありません。信じたいようなものです。想像力が燃えるようなフランボワイヤン様式の装飾と人が、憶測を働かさせる中間の区間である両者の間に実際はあるのです。人は宗教の戦争に驚きますが、その言葉の深い意味を言うなら、全ての戦争は宗教によるものです。

(一九一二年十二月二九日)

(第四卷·完)

一ノルマンディー人のプロポ IV  
【2014年1月号】

<http://p.booklog.jp/book/80794>

著者：アラン （翻訳：高村昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80794>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80794>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ